

屈斜路コタンの形成

屈斜路湖の近くに村を建てるということは、その村人たちが飲み水と食料を容易に得られる、ということを含意しました。周辺の環境、天候、大地の力、そして季節が、村人たちの日常生活のほぼすべてを規定していました。人々は、数千年にわたって、屈斜路カルデラの厳しい環境で豊かに生きるために必要な叡智を蓄積してきました。

屈斜路カルデラでの自給自足生活

屈斜路コタンの人々の生存は、周辺の動植物に依拠していました。果物を食料と薬にし、樹皮から衣服を作り、鹿・ヒグマ・魚といった動物から肉を得ていたのです。屈斜路コタンアイヌ民族資料館のこの箇所には、屈斜路カルデラに暮らす動物の絵と、乾燥させた植物が展示されています。本州の気候を弟子屈と比較したグラフは、北海道のこの地域の冬が特に厳しいことを示しています。コタンの住民は、冬に履く鮭の皮の長靴や雪靴を作り（この箇所にも展示されています）、ウサギやクロテンのような小動物を狩っていました。

火山活動が形成した大地

屈斜路コタンに人々が定住するまで、数十万年にわたって繰り返された火山活動が、この土地を形作ってきました。3 万年前、屈斜路火山は大噴火により崩壊し、数百 m の深さのカルデラができました。周囲の山々からの雨水と雪解け水がカルデラを満たし、屈斜路湖ができました。屈斜路湖は、東西 26km、南北 20km に広がっています。屈斜路湖および近くにある摩周湖を形成した火山活動を描いた図表が展示されています。